

自閉症者における状況からの他者および自己感情推測

菊池, 哲平
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/871>

出版情報：九州大学心理学研究. 3, pp.107-112, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



自閉症者における状況からの他者および自己感情推測

菊池 哲平 九州大学大学院人間環境学府

Inferring of Others' and Owns' Emotion from Situational Cues in Autism

Tepei Kikuchi (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study intended to investigate the emotion-inference performance of individuals with autistic spectrum disorders. Ten individuals with autistic spectrum disorders (mean MA; 7:8, mean CA; 24:10) and 40 normal young children (4yrs; n=23, and 6yrs; n=17) were participated in this study. The emotion-inference task was included two conditions, other-emotion condition and self-emotion condition. The results were as follows: 1) the performance of autistic group was significantly lower than that of older children group. 2) In younger children group, the performance of other-emotion condition was significantly higher than that of self-emotion condition. In contrast, in autistic and older children group, significant difference between two conditions was not admitted. 3) The response of autistic subjects included many responses "based on memory". These findings suggest that when individuals with autistic disorder inferred others' emotion, they might infer with specific strategy and based on owns' memory about self-emotional experience.

Keywords: autism, understanding of self-emotion, emotion-inference, situational cues

1. 問題と目的

Kanner (1943) により最初に記述された自閉症は、社会性、コミュニケーション、ふり能力に著しい困難を持つ発達障害として位置づけられている (Wing & Gould, 1979)。これまで自閉症の問題は言語、遊び、認知など様々な領域で研究されてきた。そのような中で Baron-Cohen, Leslie, and Frith (1985) は、自閉症児は他者の心的状態 (Mental State) を理解することに著しい困難をもつ、ことを指摘した。この能力は「心の理論 (Theory of Minds)」と呼ばれ、信念や願望などを始めとする他者の心的状態を推定し、それに基づき人の行動を解釈、予測する能力のことである。例えば誤信念課題では、主人公が現実とは異なる心的表象、誤信念を持っており、それに対して被験者はそれを知っている、という状況が呈示される。自閉症児はそうした状況下において、状況に対する彼ら自身の知識ではなく他者の誤信念に基づいて他者の行動を予測する必要がある、ということを理解するのが困難である、と示された (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Perner, Frith, Leslie, & Leekam, 1989)。

これまでに行われた膨大な数の研究結果を概観すると、ある程度自閉症児・者には固有の社会性障害があるということが明らかになってくる。この社会性の障害とは、一般的な認知能力や言語能力のレベルの低さに原因を求められるものではないし、社会的やり取りのすべてに共通して障害があるというわけでもない。例えば、自閉症児はくすぐりなどの身体接触を伴うようなやり取り

に敏感に反応するし、順番の交替がある社会的ルーティンを行い続けることに興味を示すことも多い。自閉症児は行動レベルでの他者との相互作用すべてにおいてハンディキャップを持っているとはいえない。むしろ、自己と他者の主観的世界を重ね合わせる一方で、両者を区別した対人相互の心理的な関わりを、ごく限られた形であれ経験していると考えられるだろう (Hobson, 1992)。自閉症者の対人的コミュニケーションにおける困難を自己と他者という関係性を含め検討することによって、自閉症者のコミュニケーション障害をより解明することが出来るかもしれない。

1. 健常幼児における自他の心的状態に対する理解の発達

ところで、このような内的な心的表象に対する理解の発達は近年、感情的コンピテンス (Emotional Competence) に結びつけられて考えられてきている。感情的コンピテンスとは、①自分の気持ちに気づき調整する能力、②他者の気持ちに気づき理解する能力、③自他の間で感情のコミュニケーションを適切に操作する技能、のことを指している (久保, 1998)。私たちが日常生活において円滑なコミュニケーションを行うためには、相手の人の感情に対する理解が不可欠であり、また自分の感情に十分に気づきそれを調整することが不可欠であることは想像に難くない。言い換えると、自分の気持ちの理解と他者の気持ちの理解は表裏一体であり、切り離して考えることは困難であろう。

これまで多くの研究において、心的状態の理解がなさ

れていく過程に関して、幼児は自分自身の心的状態の理解に基づいて他者の心的状態を理解するのか、それとも他者の心的状態についての理解が先行し、その後自分自身の心的状態についても気づいていくようになるのか、という問題が議論されてきた。この問題に対して主に次の3つの仮説が立てられている。まず一つは「シミュレーション説 (simulation theory)」であり、子どもは自己の心的状態に対する理解をベースに他者の心的状態をシミュレートして理解していくというものである。第2は「文化化説 (enculturation theory)」であり、心の理解は社会的経験を通してなされるとして、他者の心的状態の理解が先行し、それを自分の心的状態にも当てはめて理解するようになる、というものである。第3は「理論説 (theory theory)」であり、子どもの心的状態の理解とは心の表象的な性質に関する理論形成であると考え、自己の心的状態と他者の心的状態の理解との間に優位はなく、同時期に理解されるとしている (松村, 1994)。

そこで郷式 (1999) はこの問題を解明すべく、従来用いられてきた心の理論課題を応用し、健常幼児における自己の心的状態の理解と他者の心的状態の理解を比較した。結果、表象的な心的状態の理解に関しては他者と自己の間に優位はなく同時期に理解されることを示し、「理論説」の妥当性を示した。

ところで、他者の心的状態の理解に際しては、人は何らかの情動を交えることが多いという情動的な側面への理解が必要となる。例えば、火事の中にいる人は「怖い」から逃げ出すだろう、という予測をするためには、その人が「怖い」という情動を感じているという、情動を理解する必要があると考えられる。よって心的状態の理解を考える際には、知覚や信念だけでなく情動の理解という側面にも着目しなければならないであろう。これまでの「心の理論」研究が扱ってきたのは認知的他者理解に偏ってきた、と中野 (1997) は指摘している。よって郷式 (1999) が対象とした表象的な心の理解にとどまらず、情動などのより広い意味での心の理解について明らかにしていくことが求められよう。

それでは情動の理解に関しても、子どもは自分の心と他者の心を同時期に理解していくのであろうか。この問題を解明するため、本研究では明確に情動が生じるであろう状況を子どもに教示し、その状況の主人公がどのような情動を感じるか、という状況からの情動推測質問を設定する。例えば、プレゼントをもらったその人は嬉しい気持ちになる、といった状況や文脈が情動に及ぼす影響の理解である。このことは従来、文化社会的観点から検討がなされてきた。どのような状況・文脈がどのような情動を引き起こすのかは、その人が属する文化によって異なり、後天的に学習された表出規則 (Display rule) に依る、といわれている (Izard, 1991を参照)。こ

うした表出規則が獲得され、それを再帰的に自己の情動経験に当てはめることによって、自己情動への自覚的な統制や調整が可能となるであろう。

2. 自閉症の問題

自閉症においても、信念や欲求のみならず情動理解に関しても常に多くの研究が行われてきている。それらの研究の多くは自閉症における情動理解の困難を示唆している。代表的なものにLangdell (1981) やWeeks and Hobson (1987) における表情認知に関する研究がある。これらの結果は、自閉症児は統制群に比べ表情認知能力が有意に低く、さらに通常とは異なる認知方略を用いている可能性を示唆している。また若松 (1989) も表情図及び表情写真の認知能力について実験的検討を行い、自閉症児の基本的な表情の認知能力が低いことを見出している。そのような中で菊池・古賀 (2001) は自閉症児・者に対して、自分自身、母親の顔、そしてまったく知らない人物の顔を呈示して、表情認知課題を行った。結果、自閉症児・者は他者の表情認知課題に関しては明らかに困難を持っていた。一方、自分自身の表情の認知については統制群と比較して困難を持っていないことが示された。

それでは状況から情動を推測する場合に必要な表出規則を、自閉症者は理解しているのだろうか。「心の理論」欠損仮説からは自閉症児・者はこのような表出規則を理解していないと考えられよう。しかしながら、自閉症者自身は自らの情動を経験しているはずであり、自己の情動についてはある程度理解していることが予想されよう。よって、その情動を経験するのが自分なのか他者なのかで結果が異なるのではないだろうか。例えば「○○ちゃんがお父さんから誕生日プレゼントをもらったらどんな気持ちになるかな?」といった質問に対して、○○に他者が入るのか自分が入るのかによって、反応の違いが生じるであろう。

そこで本研究では教示する状況には主人公が被験児・者自身の場合である「自己情動条件」と主人公が架空の人物の場合である「他者情動条件」の2条件を設定した。すなわち、子どもは自己の情動に対する理解と他者の情動に対する理解のどちらかを先行して獲得するのであれば、どちらかの条件における子どものパフォーマンスが有意に高いことが予想される。そして自閉症者についても自己情動条件と他者情動条件におけるパフォーマンスを比較することによって、自閉症者の情動理解の特徴がより明らかになるとと思われる。

以上より、本研究の目的は自閉症児・者における自己の情動に対する理解を検討するものであり、具体的には文脈に依る情動理解課題における自己の情動と他者の情動の違いが及ぼす影響を検討していく。

II. 方 法

1) 対象

自閉症群：自閉症であるという医学的診断を受けている自閉症者10名 (M:F=9:1)。在籍している施設担当者との協議の上、日常的に言語による意思の伝達が可能なものが選ばれた。

統制群：統制群は、自閉症群のMAのrangeが広く、また自閉症者は言語精神年齢が全検査精神年齢よりも低いことが多いため、言語精神年齢が近いと思われる年少児群と、全検査精神年齢が近いと思われる年長児群の2群を設定することにした。年少児群は保育園に在籍している4歳児23名 (M:F=12:11) であり、年長児群は6歳児17名 (M:F=8:9) である。

2) 刺激文

笹屋 (1997) を参考に、主人公が「嬉しい」「悲しい」「怒っている」情動を表す文章を2状況ずつ作成し、それぞれ主人公が被験児自身の場合 (自己情動条件) と架空の人物の場合 (他者情動条件) に被験者毎に振り分けられた (Table 2)。

3) 手続き

実験者が各被験児に対し1状況ずつ口頭で説明した後、「○○ちゃんはどんな気持ちになるかな?」と教示し、被験児に口頭で回答してもらった。他者情動条件の場合、文脈に登場する主人公は「ゆかちゃん」という架空の子どもの名前である。自己情動条件の場合、被験児の名前を使って教示を行った。例えば、ユウキくんとい

う被験児の場合、「もしユウキくんのお父さんがお誕生日にケーキを買ってきてくれたら、ユウキくんはどんな気持ちになるかな」という教示がされた。刺激文の提示順序は条件毎にルーティン法によってカウンター・バランスされた。

被験者が無反応もしくは分からない様子が見られた場合は、再度刺激文をゆっくりと教示し、回答を促した。2度刺激文を教示しても無反応な場合は、無反応として記録した。また、被験者が意味不明な回答をした場合は実験者の即時判断によって、再度「どんな気持ちになりますか?」と教示した。しかしその場合でも、再度教示した後に回答が変化した被験者はいなかった。

III. 結 果

1) 回答の得点化・分散分析

各被験児の回答に対して、笹屋 (1997) の分析を参考に以下の3段階で評定した。よく理解している (2点)：設定した感情と類似の感情について述べている；ある程度理解している (1点)：設定感情と類似の感情について述べているようだが上手く言語化できていない (例、悲しいの刺激に対し「ママーっていう感じ」)；理解していない (0点)：無回答や設定感情と異なる感情を述べている；の3段階である。

条件別に自閉症群と年長児群、年少児群の平均値を算出し、Table 4に示した。

得られた得点について群 (3：年少、年長、自閉症) ×条件 (2：自己、他者) の2要因分散分析を行った。結果は、群の主効果が有意 ($F=17.447, df=2, p<0.01$) であり、多重比較の結果、年長児の平均値が年少児や自

Table 1 対象となった自閉症者のプロフィール

| n | CA | | | MA** | | | |
|------|------|-------|-------|-----------|-----|-------|----------|
| | Mean | SD | range | Mean | SD | range | |
| 自閉症者 | 10 | 24:10 | 2:4 | 20:8~28:6 | 7:8 | 3:7 | 5:2~13:6 |

※ MA は WISC-R 又はビネー式検査による推定。

Table 3 回答の評定基準

| |
|--|
| よく理解している (2点)： |
| 設定した感情と類似の感情について述べている |
| ある程度理解している (1点)： |
| 設定感情と類似の感情について述べているようだが上手く言語化できていない (例、悲しいの刺激に対し「ママーっていう感じ」) |
| 理解していない (0点)： |
| 無回答や設定感情と異なる感情を述べている |

Table 2 呈示された刺激状況

| |
|------------------------------|
| 【喜び】 |
| I. お誕生日にお父さんがケーキを買ってきてくれる。 |
| II. お父さんと一緒に遊園地に行く。 |
| 【悲しみ】 |
| I. 楽しみにしていた遠足が雨で中止になる。 |
| II. 可愛がっていた鳥が急に死んでしまう。 |
| 【怒り】 |
| I. 遊んでいたおもちゃを友達に無理矢理とられる。 |
| II. 描いていた絵を無理矢理友達に引っ張られ破られる。 |

Table 4 群・条件別の平均値 (SD)

| | 自己情動 | 他者情動 |
|---------------|-----------------|-----------------|
| 年少 (n=23) | 1.348 (1.88) | 2.000 (1.82) |
| 年長 (n=17) | 4.647 (0.97) | 4.824 (0.79) |
| 自閉症 (n=10) | 1.8 (1.94) | 2 (2.10) |

閉症児・者よりも有意に高く ($t=6.086$, $df=1$, $p<0.01$; $t=4.523$, $df=1$, $p<0.01$), 年少児と自閉症者の間には有意な差は認められなかった。また、条件の主効果が有意な傾向にあり ($F=3.765$, $df=1$, $p<0.10$), ライアン法による多重比較の結果、自己情動課題が他者情動課題よりも得点が低かった ($t=2.057$, $df=1$, $p<0.05$)。群×条件の交互作用は有意ではなかったものの、単純主効果の検定の結果、年少児においてのみ条件の単純主効果が認められ ($F=4.541$, $df=1$, $p<0.05$), 年長児及び自閉症者では条件の単純主効果が認められなかった。

2) カテゴリー分析

分散分析によって年少児では自己情動条件よりも他者情動条件の成績が有意に高いこと、そして年長児になるとその差はなくなることが示された。また、自閉症者の得点は年少児と同程度であり、自閉症者の情動理解に関する困難が認められたが、自閉症者の得点は自己情動条件と他者情動条件の間で有意な差は見られなかった。そこで、なぜこのような違いが生じるかを検討するため、各被験児・者の回答を質的に分析することにし、反応内容を以下に述べるカテゴリーに分類した。分類に当たっては実験者と2名の評定者で行い、評定者間で一致しない回答に関しては、協議の上3者間で意見の一致を図り分類した。

① 標的情動 (正答)

各被験児が標的とされる情動について言語化して述べている場合、このカテゴリーに分類された。例えば「うれしい」「かなしい」「おこっている」など。

② 類似した情動

言語化できていないものの、類似した情動について述べていると判断された場合はこのカテゴリーに分類された。例えば、悲しいの文脈に対して「ママーっていうかんじ」など。

③ 異なる情動

標的とされる情動と異なる情動を答えている場合は、このカテゴリーに分類された。例えば「悲しい」の文脈で「おこる」など。

④ 行動

情動について答えず、その文脈における行動を答えて

いるもの。例えば、「なく」「おもちゃをとりかえす」「わらう」など。

⑤ 記憶

「お父さんと一緒に遊園地に行ったら」という文脈を聞いて、自分が遊園地に行ったときの話を始めた場合など。

⑥ その他

意味不明のもの。例えば「かぜのようなきもち」「しんじやった」など。

⑦ 無回答

「わからない」や無回答。

各カテゴリーの内訳をTable 5に示す。

自閉症児の分類された反応数について、条件(2:自己情動条件・他者情動条件)×カテゴリー(7:標的情動, 類似情動, 異なる情動, 行動, 記憶, その他, 無回答)の対数線形モデル分析を行った。全てを要因に入れた飽和モデルのあてはめの結果、条件(u1)×カテゴリー(u2)の交互作用が有意ではなく、このパラメータを除外したモデル($\log F(ij)=u+u1(i)+u2(j)$)のあてはめが適切であった。結果、カテゴリーでは「異なる情動」の反応が少ない($z=-2.327$, $p<0.05$)ことが明らかになった。

続いて自己情動条件の反応について群(3:年少, 年長, 自閉症児・者)×カテゴリー(7:標的情動, 類似情動, 異なる情動, 行動, 記憶, その他, 無回答)の対数線形モデル分析を行った。飽和モデルのあてはめの結果、全ての主効果, 交互作用が有意であった。この内、カテゴリーの主効果では「標的情動」($z=3.094$, $p<0.01$)の反応が多く、また「類似情動」の反応も多い傾向にあった($z=1.827$, $p<0.10$)。群×カテゴリーの交互作用においては、年少児は「標的情動」が少なく($z=-2.841$, $p<0.01$)「無回答」が多かった($z=3.433$, $p<0.01$)。年長児では「標的情動」($z=3.691$, $p<0.01$)と「異なる情動」($z=3.627$, $p<0.01$)が多いが「無回答」($z=-2.152$, $p<0.05$)は少なかった。自閉症児では「その他」($z=2.198$, $p<0.05$)が多いのみだった。

続いて、他者情動条件についても同様に群(3:年少, 年長, 自閉症者)×カテゴリー(7:標的情動, 類

Table 5 カテゴリー分類された反応の内訳

| | | 標的情動 | 類似情動 | 異なる情動 | 行動 | 記憶 | その他 | 無回答 |
|----------------|------|------|------|-------|-----|-----|-----|-----|
| 年少児群 (n=23) | 自己情動 | 9% | 14% | 3% | 13% | 10% | 6% | 45% |
| | 他者情動 | 14% | 12% | 3% | 12% | 0% | 10% | 49% |
| 年長児群 (n=17) | 自己情動 | 45% | 10% | 25% | 14% | 6% | 0% | 0% |
| | 他者情動 | 53% | 6% | 18% | 24% | 0% | 0% | 0% |
| 自閉症群 (n=10) | 自己情動 | 17% | 20% | 0% | 20% | 17% | 16% | 10% |
| | 他者情動 | 23% | 13% | 3% | 13% | 20% | 16% | 10% |

似情動、異なる情動、行動、記憶、その他、無回答)の対数線形モデル分析を行った。飽和モデルのあてはめの結果、全ての主効果、交互作用が有意であった。この内、カテゴリーでは「標的情動」($z=5.258$, $p<0.01$)と「行動」($z=2.602$, $p<0.01$)の反応が多く、「記憶」の反応($z=-2.120$, $p<0.05$)が少なかった。群×カテゴリーの交互作用においては、年少児は「標的情動」が少ない傾向($z=-1.866$, $p<0.10$)にあり「無回答」が多い($z=3.761$, $p<0.01$)。年長児は「標的情動」($z=3.619$, $p<0.01$)、「異なる情動」($z=3.340$, $p<0.01$)及び「行動」($z=2.451$, $p<0.05$)の反応が多く、「無回答」($z=-1.958$)が少ない傾向にあった。自閉症者は「標的情動」($z=-1.940$, $p<0.10$)及び「行動」($z=-1.680$, $p<0.10$)が少ない傾向にあったが、「記憶」($z=2.626$, $p<0.01$)が多い傾向にあった。

IV. 考 察

1) 分散分析による得点の比較

分散分析の結果、自閉症者の得点は年長児よりも有意に低かったものの、年少児と比べた場合、差は認められなかった。よって本研究の対象となった自閉症者における文脈からの情動理解能力は4歳の幼児と同等であるといえる。また課題の主効果が有意であり他者情動課題の方が自己情動課題よりも有意に得点が高かったが、下位検定の結果、課題間に有意な差が認められたのは年少児のみであり、自閉症者及び年長児においては課題間に差が認められなかった。このことから自閉症者と年長児はどちらも文脈課題において自己情動と他者情動の理解の間に優位性が認められないことを示している。よって自閉症者は自己の情動も他者の情動も同程度に理解しているということが出来る。しかしながら、自閉症者の得点はSDが大きく、正答したものと誤答したものの差が明らかであったということも指摘されよう。

2) カテゴリー分析

自閉症者の反応をカテゴリーに分類して検討した結果、自閉症者の反応は自己情動条件と他者情動条件の間でカテゴリー別反応数に違いがなく、自己情動条件と他者情動条件のどちらにも同じような反応をしていることが示された。これは自己情動条件と他者情動条件で異なる反応をした健常幼児とは全く異なる結果であった。よって、健常の幼児は自分の情動を想起する場合と他者の情動を理解する場合で異なる方略を用いているが、自閉症者はどちらの場合も同じような代償的な方略を用いている可能性が示唆されるだろう。加えて、本研究の対象となった自閉症者はCAが20歳以上の成人であり、社会生活経験の豊富さが影響しているとも考えられる。

また「異なる情動」の反応が有意に少ないという結果

が出た。よって自閉症者は文脈から情動を推測する際に、全く異なる種類の情動を答えることが少ないことが示唆される。健常幼児においては「異なる情動」反応のほとんどが「悲しい」と「怒っている」の混同であり、自閉症者はこうした混同がほとんど見られなかった。この結果からも自閉症者は情動を介した方略を用いていないことが示唆され、そのため健常の幼児であれば混乱してしまう「悲しい」「怒っている」が区別できたといえよう。Sacks (1997) がその著書の中で紹介した Temple Grandin のエピソード「他者の感情や気持ちを捉えることのできないため、いろいろな場面のデータベースを自分の頭の中に作った」というのも、自閉症児・者が状況から情動を理解するために代償的な方略を用いていることを示している。

一方、年少児や年長児と比較した場合、自己情動条件においては「その他」に含まれる反応が自閉症者には多くみられた。これは自閉症者の反応の中にかなり意味不明なものも多く(例えば遠足が中止になった、という状況で「体育館」という回答をするなど)、評定者が判断に迷いそのカテゴリーに分類した、ということが挙げられる。しかしこれらの反応は施設などで日常接している指導員などが聞いた場合、これらの反応が違うカテゴリーに分類される場合もある(「体育館」は遠足が中止になった場合の代替として体育館でお弁当を食べたことへの「記憶」反応として分類される可能性がある)。これまでに行われてきた研究でも、ある物事に対する予備知識を有していなければ分からない話を自閉症児・者は相手が誰であれ平気でしてしまうということが指摘されてきた。これは自閉症児・者における他者が有している信念や知識を読み取る(mind-reading)ことの障害の現れであるとされた(Happe, 1994)。本研究の結果もこうした自閉症児・者の他者の信念や知識を読み取ることの障害を示していると思われる。

一方、他者情動条件においては、自閉症者の反応は「記憶」反応が年少児や年長児よりも多かった。自己情動条件においても「記憶」反応は多かったが、健常幼児は他者情動条件で「記憶」反応を見せることがほとんどなかった。よって自閉症者は他者の情動を推測する際に自己の経験を想起していることが多く、自己の情動を手がかりにして他者の情動を理解しようとしているといえる。このことは Perner, Frith, Leslie, Leekam (1989) が行った「スマーティ課題」における自閉症児の反応を想起させる。Perner et al. (1989) は自閉症児・者が自分の知識や信念を基にして他者の行動を予測していることを示した。本研究はスマーティ課題で必要となるような知識や信念についての理解ではなく、基礎的な情動に対する理解を検討したものであるが、知識や信念と同様に情動についても自閉症児・者は自らの情動を手がかりにして回

答しているといえるかもしれない。このことはより詳細な実験デザインを用いて今後も検討していくべき課題であろう。

V. まとめ

これまで自閉症児・者は情動のような他者の心的状態を理解することが困難であると指摘されてきた。本研究の結果はこれまでに行われた膨大な数の研究結果を追認するものであった。その上で自閉症者の反応は自己と他者の区別が困難であることを示唆するものが多いことが明らかとなった。このことから自閉症者は他者情動の推測や自己情動の把握に際し、自他の関係性という視点を含めながら捉えることが困難であり、その結果として情動のコミュニケーション能力に質的な歪みが生じている可能性が示唆される。また本研究の対象となった自閉症者は全員成人に達した年長者であった。よって社会的経験の豊富さが他者の情動を推測する際に自己の経験と照らし合わせてみるという方略を用いるのに影響しているのかもしれない。

今後の課題としては、より発達早期にある幼児期の自閉症児について検討し、また自己の情動を把握するコンピテンスについての発達プロセスに関しても健常幼児を対象にしながら検討していくことが挙げられよう。その一方、本研究においては他者の存在を「一般的な他者」という位置づけとしたが、実際のコミュニケーション場面では、その他者が自分にとってどのような意味を持つのか、といった関係性（例えば全く会ったこともない人と母親などの場合）も重要な問題としてあげられる。本研究ではそうした他者との関係性を分析単位としなかったが、今後はそうした点を考慮に入れて検討する必要があると思われる。

謝 辞

本研究は平成12年度大分大学大学院修士論文として提出した論文の一部を加筆・修正したものです。同大学院在籍時にご指導頂いた同大学の古賀精治先生、ここにまとめるにあたりご指導・ご助言をいただいた本学の大神英裕、遠藤利彦両先生に感謝いたします。

引用文献

- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. & Frith, U. (1985) Does the autistic child have a theory of mind? *Cognition*, **21**, 37-46.
- 郷式 徹 (1999) 幼児における自分の心と他者の心の理解—「心の理論」課題を用いて—。教育心理学研究, **47**, 354-363.
- Happe, F. (1994) *Autism: an introduction to psychological theory*. London: University College London Press. 石坂好樹・神尾陽子・田中浩一郎・幸田有史訳 (1997) 自閉症の心の世界：認知心理学からのアプローチ。星和書店。
- Hobson, R. P. (1989) Beyond cognition: A theory of autism. In Dawson, G (Ed.), *Autism: New perspective on diagnosis, nature and treatment*. Guilford Press, New York, 22-48. 野村東助訳 (1994) 認知を超えて—自閉症の理論—。野村東助・清水康夫 (監訳), 自閉症：その本態, 診断及び治療。日本文化科学社, 21-46.
- Izard, C. E. (1991) *The psychology of emotion*. Plenum Press New York. 莊巖舜哉監訳 (1996) 感情心理学。ナカニシヤ出版。
- Kanner, L. (1943) Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, **12**, 17-50.
- 菊池哲平・古賀精治 (2001) 自閉症児・者における表情の表出と他者と自己の表情の理解。特殊教育学研究, **39**(2), 21-29.
- 久保ゆかり (1998) 気持ちを読み取る心の成長。丸野俊一・子安増生 (編), 子どもが「こころ」に気づくとき。ミネルヴァ書房, 83-110.
- Langdell, T. (1981) Face perception: an approach to the study of autism. Ph. D. Thesis. London: University College.
- 松村暢隆 (1994) 幼児の〈心の理論〉と理論説—模擬説との議論について—。心理学評論, **37**, 92-107.
- 中野 茂 (1997) マインドの理論から心情的共感論へ—乳児期に始まる心を分かち合う関係—。心理学評論, **40**, 78-94.
- Perner, J., Frith U., Leslie, A. M. & Leekam, S. R. (1989) Exploration of the autistic child's theory of mind: knowledge, belief and communication. *Child Development*, **60**, 689-700.
- Sacks, O. (1995) *An anthropologist on Mars*. New York: Knopf. 吉田利子訳 (1997) 火星の人類学者：脳神経科医と7人の奇妙な患者。早川書房。
- 笹屋里絵 (1997) 表情および状況手がかりからの他者感情推測。教育心理学研究, **45**(3), 312-319.
- Weeks, S. J., & Hobson, R. P. (1987) The salience of facial expression for autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **28**, 137-152.
- Wing, L. & Gould, J. (1979) Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: epidemiology and classification. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **9**, 11-29.